

## 冬来たりなば……

キルヒアイスがラキエンテス療養所へ移って約一ヶ月。確立された覇権をより強固に仕立て上げるために、ラインハルトは極度の多忙さの中にあつた。回復途上にあるキルヒアイスも思つうように見舞えずに苛立つ彼を見かねたのか、アンネローゼがみずからラキエンテスへ赴くと言い出したのが、キルヒアイスが移ってから一週間ほど前のことである。

アンネローゼがついていてくれればと安堵して送り出しはしたものの、姉と親友を欠いた毎日にはどこか虚ろなものを感ぜずにはいられないようだった。その空虚さを紛らわせるためか、ラインハルトはさらに職務に精励し、それがまた彼により一層の多忙さを募らせるのだから、これは悪循環だった。

極度の多忙さも、時に奇妙な空白を生じることがある。

この日の午後からその翌日の午後にかけて、ラインハルトのスケジュールに偶然のように現れた空白を発見したのはヒルダだった。

「しかし、今日の午後には『賊軍財産整理委員会』でオーベルシュタインと会う予定があるはずだ」

リップシュタット戦役の結果、数千を数えた門閥貴族の過半が当主とその家族を失つた。彼らの遺した莫大な資産は帝国政府、すなわちラインハルトによって没収され、干上がりかけてきた国庫を潤した。わずかに『中立』の旗の下に生命を全つした者たちも、過剰なほどに抱え込んだ財産を守りきることはできず、多くは没落、かつて彼らが虫けら同然

に扱っていた平民以下の生活へ突き落とされていった。

が

「数字が合わぬ」

最初にそれに気づいたのは、後にラインハルトのもとで財務尚書を務めることになるオイゲン・リヒターである。賊軍の主魁ども、つまりはかつての門閥貴族たちの財産の収公作業を進める内、帳簿上の数字と実際に国庫に収められた金額とのギャップが日に拡大し始めたのだ。

「フェザーンの拜金主義者どもが手放さめのではないのか？」

帝国以外にも存在する貴族たちの資産と言え、フェザーンである。

事実、すべての貴族にとって、フェザーンの債権がその資産の多くのパーセンテージを占めるものだった。多くは在フェザーンの商船会社の株式や社債、銀行への現預金、それにフェザーン自治領主府自らが発行した債権、つまりはフェザーン国債と呼ぶべき債権も恐るべき額に達していた。

「参つたな、帝国の資産と言つても、相当部分はフェザーンの稼いだ金ではないか」

ブラツケが天を仰いだのも当然のことだった。

帝国政府の要求に対して、フェザーン側は激しく抵抗した。

「出資者が没落した場合、投資資金はすべて我々のものであり、返却の要を認めない。またそのような資金を当社が有しているか否かを回答する義務も負わない」

などというのはおとなしい方だった。帝国政府からの照会に対して、大多数は沈黙をもって回答に代えるのみだった。

フェザーンの抵抗に対して、リヒターは財務省内にプロジェクト・チームを編成、資産の回収を強行しようとした。

「キルヒアイス上級大将が辺境宙域でやってのけたやり方を踏襲すれば

よいのだ。フェザンの連中は帝国と叛徒領の間で商品や金を流して儲けている。帝国から追い出されれば、それだけで片腕を切り落とされたようなものだ。従えば今後も帝国でのビジネスを認められ、帝国政府との取引も許可される。さもなければ、帝国の市場からは追放。これあるのみ」

リヒターのこの強硬策は部分的には功奏した。いくつかのフェザン系資本が抵抗を断念し、旧貴族の財産の相当部分が帝国財務省の引き継ぐところとなった。が、他の大多数が市場からの追放を含む帝国政府からの強硬姿勢に対してさえ、沈黙を継続したのである。

正確には沈黙ではなく、無言の反撃といふべきだっただろう。四八八年末、財務省のプロジェクトチームメンバーの内、一人が悪質な轢き逃げにあつて重傷を負い、さらにもう一人が通り魔に斬りつけられて、これも重傷を負つたという事件が起きた。確証こそなかったが、これをフェザン側からの回答ととらえたりリヒターは、彼が最も悪質と認めた二、三のフェザン系金融機関と輸送会社に対して帝国内での全面的な業務禁止を命じる。

反応は二方向から返ってきた。

一つはフェザンの在帝国高等弁務官事務所からの抗議。ボルテック高等弁務官自らが宰相府にリヒターを訪れて、抗議の文書を提出するとともに帝国宰相たるラインハルトとの直接面談を求めたのだ。

リヒターは拒絶した。

「帝国宰相とお会いしたいのであれば、その前になすべきことがあるだろう。メッセンジャーボーイが卿の唯一の仕事というわけではあるまい」  
「フェザン自治領主府はフェザン商人の代理人であつて、彼らの支配者ではない、ということをお分かりになつていただきたい。自治領主も、その代理人たるこの私も、帝国政府とはなんとか融和的な共存をこ

そ願え、無闇な反発を試みているわけではありません」

「ならば、我が帝国の要求に素直に従うよう、フェザン全域に周知せしめるべきだろう。所有者を、旧貴族どもから帝国政府へ書き換えろ、そう言っているだけだ。運用は卿らが続けられよいし、十分なマージンも保証しよう」

「やはり、お分かりになつていないようだ」

ボルテックのため息は明らかに演技したもの、とりヒターには映つた。「フェザンの行く先を決めるのは、無数のフェザン商人たちの総意であつて、一人の自治領主の意志ではないということ。自治領主が閣下のご意向に沿つ決断をされたとしても、フェザンの商人たちがそれに従わねば意味がない。そう申し上げに来たのです」

ボルテックの議論は、リヒターには詭弁としか映らなかつた。

彼を門前払いしたことへの報復だったのか否か、リヒターにしてみれば報復と解釈せざるを得ないところだった。さらに年が明けると別のメンバー宅に届いた手紙爆弾が爆発、本人と家族二人が重軽傷を負つたという事件にまでエスカレートしたのだ。

ラインハルトがリヒターに、プロジェクトチームの解散を命じたのはその直後のことである。

「これはあからさまなサボタージュであり、明白極まる脅迫です」

意外な命令に憤慨するリヒターに、ラインハルトは応じた。これは帝国として対応すべき脅威だ、と。その上で、ラインハルトはオーベルシュタイン、リヒター、ブラツケ、オスマイヤールの四名を改めて招集、フェザン資本が返還を拒む旧貴族財産の回収に関する横断的な対策チーム『賊軍財産整理委員会』を立ち上げるように命じたのだ。ただし、ラインハルトが与えた任務はそれだけではない。

「以前から門閥貴族どもが叛徒領との間で金をやりとりしていた節があ

る。その実態を明らかにせよ。貴族どものことだ、あるいはフェザンばかりではなく叛徒領内さえ投資先として金を注ぎ込んでいたかも知れない」

ラインハルトの言葉に驚いた者がいたとしても、それはオーベルシュタインではなかっただろう。リップシュタット戦役に先立ち、二億帝国マルクという巨額の現金を工作資金として同盟領へ送金した。この作業が驚くほど容易く行われたことに疑問を持ったのがラインハルトであり、彼が帝国と同盟の間での資金の流れの調査を命じたのが他ならぬオーベルシュタインだった。

既にオーベルシュタインは、フェザンを中継として、帝国と同盟領の間に巨額の資金が煩雑で不明朗なルートを通じて流れていることを洗い出していた。ラインハルトが、その報告に最も大きな関心を寄せるのは当然のことと言えた。

「間に合わないな」

わずかに考え、ラインハルトは残念そうに首を振った。ラキエンテスの療養所は帝都から高速地上車で片道四時間、日帰りできる距離ではない。『賊軍財産整理委員会』をすっばかすのでなければ、明日の午後の公務に間に合うように帝都に帰ってくるには無理がありすぎた。

それならば予定を延期すればいいようなものだが、この金髪の若者はこと公私の別には厳格すぎるほどの厳格なのだ。それに、『賊軍財産整理委員会』は、現時点ではラインハルトの最大の関心事の一つだったこともある。

「閣下」

ヒルダの声は短く、事務的だったが、ラインハルトの肩を大きく動か

すに十分だった。

弾かれたようにコンソールから顔を上げ、蒼氷色の双眸が蒼い炎を纏って一直線に見つめてくる。ヒルダほどに精神の靱さをもった女性でなければ、この一瞥だけで気死しかねないほどの強烈な凝視だった。

が、この時のラインハルトの表情には多分に苛立ちが多量に含まれていた。

主席秘書官として仕えるようになってすでに半年以上。長いとは言えないまでも、ヒルダのようにきわめて活発で鋭敏な知性の所有者にとつて、この金髪の覇者の、覇者の面以外の一面を理解するには十分な時間だったのだ。

「オーベルシュタイン上級大將からは『賊軍財産整理委員会』の報告は明後日の午後に延期されたしとの要請が入っています。ヘル・オスマイヤとヘル・ブラツケからの、まだ二日ほど余分に準備の時間を頂きたいとの意向によるものだ」と

「なに？」

「さきほど、御裁可を頂いたと思えますけれど？」

「そうだったか？ 済まない、フロイライン。どうも今日は……」

あるまじきことに、ちょっと面目なさそうな表情でラインハルトはコンソールをチェックする。ヒルダに指摘された事項を見いだして大きく頷いた。

「そうか！」

拭い落としたようにラインハルトの表情から苛立ちが消えた。その金髪さえもが、輝きを増したかに見えた。

「車と護衛を手配いたしました。三〇分後に車寄せへ参ります」

「感謝する、フロイライン」

ヒルダが、ラインハルトの“水晶を透過して煌めきわたるような微笑”

を目の当たりにしたのはこの時が最初かも知れなかった。一瞬にして覇者としての矜持も、猛々しいほどの野心家としての猛気も消え、親友を案じる純真な少年の表情を見いだして、ヒルダは絶句する。

「あの、いいえ。職務ですから……」

頷き、ラインハルトはもう一度、執務デスクから立ち上がる。大きなコンパスでヒルダの前を横切り、執務室を出ようとして、唐突にその動作を止めた。

「フロイライン……」

「はい、閣下？」

「オスマイヤーもブラツケも、昨日までは準備が終わっていると書いていたような気がしたのだが……？」

「……何か突発的に報告書に入れなければならない事項が見つかったのだと思いますわ、閣下」

蒼氷色の眸に覗き込まれるような錯覚に、ヒルダは両の目に力を込める。昨夜、オスマイヤーとブラツケに入れた映話<sup>ウツシツナ</sup>のことを口にする必要はないと思った。宰相閣下が余りにお疲れになっていては、それほど重要な報告も判断を誤られてしまう可能性があると思います。ヒルダの論法に、オスマイヤーは苦笑し、ブラツケはちょっと渋面をつくって同意したのだ。

何かを察したように、ふっと蒼氷色の視線が弛んだ。

「ありがとう、フロイライン……」

最初気づいていないようだったラインハルトだが、一月末、金曜日から月曜の朝にかけてのスケジュールの空きを告げられると、さすがに察したようだった。

「わたしを気遣ってくれるなら、余計なことだぞ、フロイライン」

カプチュランカの冷気を思わせる口調に一瞬身を竦ませたヒルダだった。彼女が並みの女性なら、独裁者の逆鱗に触れた恐怖でひたすらに身を縮めて慈悲を乞うだけだっただろうが、彼女の犀利さは、冷徹な口調の底に微かに揺れる繊細な響きを聞き取っていた。

本心から怒っておられるのではない。

賭けに近かった。

「前々回と前回、ラキエンテスへお出かけになられた翌日の会議はいずれも大きな成果を得ております。前々回は『賊軍財産整理委員会』でしただけで、その時は……」

殊更に事務的な口調で続けようとするヒルダに、ラインハルトはしばらく凍てついた蒼い焔を思わせる視線を据え続けていた。

「済まなかった」

その言葉はヒルダを驚かせた。

ラインハルトの表情から冷厳さが消え、あの微笑が再び、その秀麗な容貌を覆っていた。

「気を使って貰うのに慣れていないのだ。フロイラインの言うとおりだ。時間があるのであれば、見舞いに行くのは悪いことではないな」

「ごつやら、キルハイイスも恢復の見通しがついてきたようだ。近い内にリハビリーも始められるだろうし、上手く行けば来年の七月頃には軍務に復帰するのも不可能ではないらしい。」

まるで学校での自慢話を母親に聞かせている少年みたい……くすつと笑いかけ、ヒルダは慌てて笑顔を引っ込める。謹厳な表情を貼り付けた高級官僚の行き交う宰相府では、笑顔は奇妙なほどに浮いて見える。

「フロイラインは、この週末はどうするのだ？」

「は……」

「いや、なに……」

わずかな躊躇いを先行させてから、ラインハルトが切り出した言葉はヒルダを驚かせた。

「かなり疲れがたまっているように見えるが、私が不在の間は休暇をとってはどうか?」

「休暇……でございますか?」

疲れていないかと言えば、多忙の上に幾つか『超』という文字を重ねなければならぬほどの多忙さを極めるラインハルトのスケジュールである。それをやりくりし、元帥府と宰相府のメンバーを調整して午後と翌朝までの空き時間を確保する。デスクワークにも手を抜かないラインハルトゆえ、残務が山のようにということはないが、その作業が楽なわけはなかった。

特に楽ではないのが、『賊軍財産整理委員会』の主査であるオーベルシュタインと、キルヒアイスを欠く現在のローエングラム元帥府において、実質的に帝国軍を管掌しているというべきロイエンタールを相手にすることだった。ラインハルトに時間を確保させるためには、細かく時間を調整した上で、彼らの同意を取り付けねばならない。

「委員会の報告については明日の午後にもまとめてお時間を確保することができます。その際に、懸案事項の中間報告を受けたいと、元帥は申されておいでです」

『ふむ……』

人ならぬ青白い光の宿した義眼と対峙するのは、映話スクリーン越しであっても難事の部類に属した。たとえ、彼女が『元帥の意向』として伝える内容が、間違いなくラインハルトの言葉であったとしても、この人物は、ラインハルトが語るであろう内容と、ヒルダが伝えるメッセージとの間のわずかな矛盾をさえ、こともなく見抜くのだ。

『了解した、と元帥にお伝えしていただく』

スクリーンの向こうで、半白の頭が応諾を示してうなずくのに、ヒルダは安堵の息をつかずにはいられなかった。

そして、ある意味、オーベルシュタイン以上に気を遣うのがロイエンタールの方だった。オーベルシュタインとは違い、些細な点にこだわると言うことはなかったが、ヒルダの思うには予定変更の連絡がヒルダを介しているという、その点をロイエンタールは余り快く思っていないようだったのだ。

「何か不審な点でも?」

一度、そう確認してみたが、返ってきたのは明確な否定の意思表示だった。

『ローエングラム公のご意向がそうなら、臣として異論はない』

左右、色の異なる瞳に浮かんだ光が、あからさまな猜疑をはらんでいように感じたのは果たして錯覚だったのか否か。

父を説いて、マリンドルフ家をラインハルト陣営に付かせた時よりも、もっと危ない橋を渡っている自分に、ヒルダは気づいている。一つを誤れば、あるいはロイエンタールなりオーベルシュタインなりが、彼女の伝える『ラインハルトの意向』に明白な矛盾を見いだせば、『帝国宰相主席秘書官たるの地位を利用して、主君を影から操ろうとする、獅子身中の虫』なる非難の箭が向けられる先はヒルダ自身にほかならないのだから。

幼い日、と表現するのは正確さを欠くだろう。ラインハルト・フォン・ローエングラムという巨大な個性の存在に気づくことになったできごととの邂逅は、彼女が一〇代後半の少女だった時代まで、わずか三年を遡るに過ぎない。帝国社会の抱えている矛盾と不公正さへの憤りであり、最初、ヒルダは、そうした帝国の病巣への劇的な特效薬としてのライン

ハルト・フォン・ミューゼルに着目したのだ。

耐え難いほどに激み、停滞した帝国の社会が、ラインハルトという人の形をした颯風により、一挙にその弊風を吹き払われることを期待したと言っても良い。帝国社会が一夜にして覆っていく中、持てる力のすべてを尽くして、歴史の中に自らの名を刻印していきたい。そうした野心から無縁だったと主張するつもりも、ヒルダにはなかった。

ヒルダほどの犀利さと精緻さに恵まれた頭脳の所有者でなければ、気づかなかつたのかも知れないし、あるいは才質のそうした部分とは完全に無縁の別の気質の有無がことを左右するのもかも知れなかった。

「この方は、ただの覇者ではない」

帝国宰相首席秘書官として仕えるようになってわずか数ヶ月。ヒルダがそれに気づくのに要した時間はわずかだった。一五歳、少尉として任官してからわずかに七年あまりで帝国軍のみならず、小揺るぎすら見せていなかった門閥貴族支配を打倒し、事実上の帝国の支配者の座にまで駆け上がった金髪の覇者。それは確かに、ラインハルトの最もきらびやかな個性の一面であり、ヒルダが最初、この若者に大きく惹かれたのも、黄金の炎をまとうかに見えるほどの、圧倒的な覇気のオーラだった。だが、それが確かに彼の一面であり、かつ、一面に過ぎなかった。

ヒルダが目にしたラインハルトの別の一面は、親友の負傷と不在に苛立ち、姉アンネローゼの看護を信じつつも、そのアンネローゼの不在にも心の平安を乱される、繊細で純粹な少年の姿だった。そして、あるいはこちらこそが、ラインハルトという人物の本質ではないかとさえ思ってしまうようになっていたヒルダだったのだ。

ゆえにこそ……と思っただけではなく、彼女自身、まったく自分らしくないことに、それは直感だった。

「この方と、キルヒアイス提督を長く会わないままに置いてはならない」

なぜそうなのだ、と問われれば答えに窮することも分かっていた。周囲から『可愛くない！』と非難されるほどに論理的であることが、最も自分らしいことであると信じてきたヒルダにとって、直感を信じることは最も彼女らしくないことと思われたのだ。にも関わらず、ヒルダは自分の正しさを確信していた。そのためにラインハルトが玉座に着くのが遅れたとしても、彼はキルヒアイスともあらねばならない。ジークフリード・キルヒアイスがその傍らを離れたとき、ラインハルトはラインハルトであることを止め、一介の独裁者に成り下がるに違いない、と。

「できれば火曜日までの賜暇としたいが……」

ラインハルトの言葉が、ほんの少し現実世界から足を離しかけたヒルダを、宰相執務室へ連れ戻した。

「水曜にはまた統合戦略会議があるから、火曜には出てきてほしいのだが、どうだろうか」

ちよつと濟まなさそうに言うラインハルトの心遣いが何となく嬉しく、ヒルダは自然に微笑みを浮かべて軽く頭を下げた。

「お心遣い、ありがとうございます。では、週末と月曜の業務の引き継ぎの準備をして参ります」

儀礼的に押さえようとした口調がちよつと弾んだ。

ラインハルトは書類に伸ばしかけた手を止めて、あるつことかちよつと視線を宙にさまよわせた。

まるで、嘘をついているのがばれて言い訳を探している子供みたい……軍神ともみまごう美貌と政戦両略に関する巨大な才能を併せ持つラインハルト・フォン・ローエングラム公爵。帝国元帥にして帝国軍最高司令長官、そして帝国宰相。ゴールデンバウム朝銀河帝国の篡奪と、

自由惑星同盟の打倒、銀河の統一を目指す、恐れを知らない野心家。硬質で煌びやかな外見の内側には、しかし、繊細な少年の魂が見え隠れする。

「引き継ぎなどしていると遅くなり過ぎはしないか」

ラインハルトが、ヒルダの補佐をしている若い秘書官補の名を上げるのにヒルダは軽く驚いた。普段、ラインハルトは彼とはほとんど面識がないはずだった。エルスターという名の件の秘書官補の能力に関して言えば、ヒルダもラインハルトに全く同意見であり、人事上の唯一の評価基準が有能さに限られるかに見えるローエングラム宰相府にも、ごく僅かな例外が存在する。エルスター秘書官補に会った時、ヒルダは密かにその思いを新たにしていた。

「わたしも不在になる。賊軍財産整理委員会もどつにか動き出したよだから、それほど引き継ぎに時間を割くこともあるまい。オーベルシュタインたちには必要があれば、いつでも連絡をためらわぬように言い置いていく」

「ですが、閣下、賊軍財産の件はまだ継続調査となっている課題が多数残っています。一段落ついたらとはまだ、とても言えませんし、ラキエンテス海岸はリゾート地としては一流ですけれど、帝都との連絡は……」

「フロイライン」

意外なことにその声は微笑を含んでいた。

「あなたと議論するのは楽しいし、得られるものも多いが、今、その件を話し始めたのでは時を要しすぎる。せつかく明日から休暇なのだから、今日は早めに帰宅してほしいのだ」

その微笑が、あるいは論理よりもヒルダの反論を封じる上で有効だったのかも知れなかった。ヒルダは察したのだ。ラインハルトが本気で彼女の疲労を案じているのだということ。

「承りました、閣下。では、最小限度の範囲で引き継ぎをしておくことにいたします」

微かに顎を引いて、ラインハルトはヒルダの言葉への同意を与えた。

自室というのは正確ではなく、宰相府の秘書官室を何人かの同僚と共有している。自分のパーティションに戻ったヒルダは、引き継ぎのためのファイルを集めた。あまり念入りにやらなくて宜しい、とはラインハルトから言われていたにしても、結局、ファイルの編集と補佐官補への引き継ぎミーティングで、その日の午後の大半が消えた。並行して、ラインハルトのラキエンテス行きの手配を整え、帝都との通信回線の確保や、元帥府・宰相府への申し送りをすませた頃、すでに帝都はとつぱりと闇に包まれており、秘書官室内でも彼女のパーティション以外はすべて灯が消えていた。

そろそろ今日は引き上げよう……他の人たちももう業務を終わつたよ。うだし。

そう思つてターミナルの灯を落としたとき、ヒルダは人の気配を察した。

「……？」

目を上げたヒルダの視界に、花があった。薔薇ではない。おそらくはどこかの庭園の片隅でもひっそりと咲いていたに違いない、小さな白い花だった。

「……閣下？」

花が独りで宙に浮いているわけはなく、花を握っている手から、腕、肩を経由して花の所有者の顔を確認する……までもない。その肩を覆っている豪華な黄金の髪のある所有者を見誤ることはできないのだから。

「ちょっと困ったような表情で、ラインハルトは手にしていた花の束……と言つには余りにささやかだったが……を差し出した。」

「あの、これを」

「下さるのですかと確認するのもおかしい気がして、ヒルダは花を受け取つた。」

「フロイラインもその花が好きなのか？」

「姉上アンネロゼが好きだったのを、ちょっと中庭に出たときに見つけてきたのだ、というラインハルトの口調はとってつけたように素っ気ない。」

「ええ、名前は知りませんが……」

「それは良かった。わたしが持つていても、枯らせてしまっただけだからな」

咳払いが先行する。

ラインハルトが何か、口にしようとして躊躇っているらしいことを、ヒルダの明敏さは正確に悟つていた。席を立ち、グラスに水を満たして花を挿す。細身のカット・グラスの放つ煌めきが、何の変哲もない白い清楚な花を意外なほどに引き立てる。ラインハルトもちょっと驚いたように目を細めた。

「休暇の間だが、何か予定はあるのか？」

突然の賜暇だったから、まだ予定を入れるところではないというヒルダに、ラインハルトはもう一度、口もつた。

「実は頼みたいことがある……わがままと言えば、わがままなのだが……」

「はい？」

一瞬曇めた眉を、ヒルダはまもなく晴れ晴れとした微笑に緩めた。中庭で摘んできた野の花と引き替えに頼むなどと思われては困るのだが、と前置きしてラインハルトは切り出したのだ。

「ラキエンテスへ同行してほしいのだ。もし、休暇中に他に予定がないのなら、だが」

アンネロゼが滞在している別荘でもよいし、他にコテージを手配しても良い。キルヒアイスもそろそろ快方に向かっているようだし、アンネロゼも話し相手がいないので無聊をかこっているだろう。

早口にそう言い切り、それからラインハルトはひどく言いにくそうに付け加えた。

「わたしもフロイラインがいてくれると、何かと……」

便利、とても言いかけたらしい。さすがにそれではと思つたのか、眉を顰めて言葉を探していたが、やがて努力を放棄したようだった。

「いやなら、別に構わないが」

微笑つてヒルダは答える。否の回答は用意していなかったし、その言葉の口にした瞬間、ここしばらく心のどこかでもやもやとわだかまっていた驕りが不意にその姿を消してしまったような気がした。胸の中を涼しい風が通りすぎていくような。疲れているだろうから休めと言つておいて、実はラキエンテスへ同行してほしいなどというラインハルトの『我が儘』が妙に微笑ましいものに感じられた。と言つより、どこかでラキエンテスへ、正確に言えば、ラインハルトにとって最も大切な人々のもとへ同行したい。そんな気分が自分の中にあつたことを、このとき、ヒルダは確かに確認している。

「はい、閣下。同行させていただきます」

執務室へ戻るラインハルトを見送り、ヒルダは電源を切つたばかりの秘書官用ターミナルに火を入れた。週末の彼女への連絡先を書き換えるために。